

「母子間のコミュニケーションにおける 自己不全感の伝達に関する研究」

分担研究：「妊産褥婦へのエモーショナル・サポートに関する研究」
研究協力者 崎尾 英子（国立小児病院精神科）

〔要約〕：母子間で展開されるコミュニケーションにおいて、自己不全感がどのようにして母親から子どもへと伝達されるかを知る目的で調査を行なった。今回の調査の対象は某公立中学校の2年生106名とその母親である。

用いた調査用紙は、自分が母親にある発言をした時に、母親が返すであろう返答を二つの群に分け、どちらの群の返答をされることが多いと子を感じているかを知るためのものである。

この場合、ある「発言」は、例えばテストの点数が悪かったことを報告するといった、子どもが自分の「もろさ」を親に明かすものが主として選択提示してある。母親に記入させる場合は、母親が中学生時代に、自分の母親がどのように返答したかを想起して選ぶように指示してある。

子があるメッセージを出した場合に母親が示すであろうと子が考える二つの応答群は、

- (i)自己不全感喚起的応答群、
- (ii)自己完結的応答群

とされ、自己不全感喚起的応答群での合計点数が高い場合には、「自己評価が低い」、「学校に行きたくない気持ちが強い」ことと相関することがすでに示されている¹⁾²⁾。

また、親の反応及び子どもの反応8項目から、どの程度母親との間に交されるコミュニケーションの在り方が、子どもの自己不全感あるいは自己完結感を説明し、またどの程度母親のコミュニケーション反応特性が子に伝えられるかを検討した。

〔見出し語〕：対称的相互作用パターン、相互補完的相互作用パターン、自己不全感、コミュニケーション、子どもの精神保健

〔はじめに〕：コミュニケーション理論及びコミュニケーション研究の成果から、人間の精神保健の良否は、その人間のおかれた情緒的コンテクストに依存することが知られている。

母親が子どもを再生産し、その子どもが再び母親になるという女性のライフサイクルにおいて、母親の情緒的態度はどの程度子どもに影響するのであろうか。

子が成長する過程で「不登校」をはじめとする、精神的援助を必要とする事態となるのに、母親の情緒的態度はどのように影響するのであろうか。

母親がよかれ、と思い、あるいは習慣から子に投げ与えている言葉は、どれほど子の精神保健に好ままたは悪影響をもたらすものであろうか。

そして母親の子への返答の態度や習慣は、それを修正することで子の精神保健状況が悪化することを予防できたり、さらには向上させたりすることができるものであろうか。

これらの問いに答えるには、親と子の間で展開されるコミュニケーションがどのような特徴を示す場合に子の自己不全感が強まるのかを知ることは意義がある。

これまでのコミュニケーション研究において、大別して人間の相互作用パターンには二つのものがあることが知られている。

その一つは相互補完的相互作用パターンと呼ばれる。これは、相互作用にあずかる二者の取る行動が異なっているながら、フィットしあうものを指す。

例えば赤ん坊が泣くのを聞いて養育者はその状況で適当と考える行為を選択する（例えば授乳する、おむつを交換する、だっこするなど）。赤ん坊から提起される行動は「泣く」それであり、養育者の行動はさまざまな「養育行動」である。

これら二者の取る行動は互いに異なりつつも、こちらのある行動が相手のある行動を誘う、という意味で「フィット」していると考えられるのである。

もう一つのパターンは対称的相互作用パターンと呼ばれる。二者の取る行動が鏡を介して対称であるような、似たものである場合を言う。

大人同士の儀礼を尽くすありさまはこの典型であり、一方軍備拡張が2国で互いにエスカレートする様子も対称的相互作用パターンの例である。

家族間のコミュニケーションに限ってみると、子どもと養育者の間では、子どもが赤ん坊であるうちは相互補完的パターンが圧倒的に優勢である。

次第に子どもが自分でできることが増えるにつれて、対称的パターンが増える。親の指示に子が反発し、それを親が叱る、などは対称的パターンの萌芽の一例であろう。

子が大きくなるに従い、親も子ども状況に応じて相互補完的パターンと対称的パターンを柔軟に使いわけるようになる。

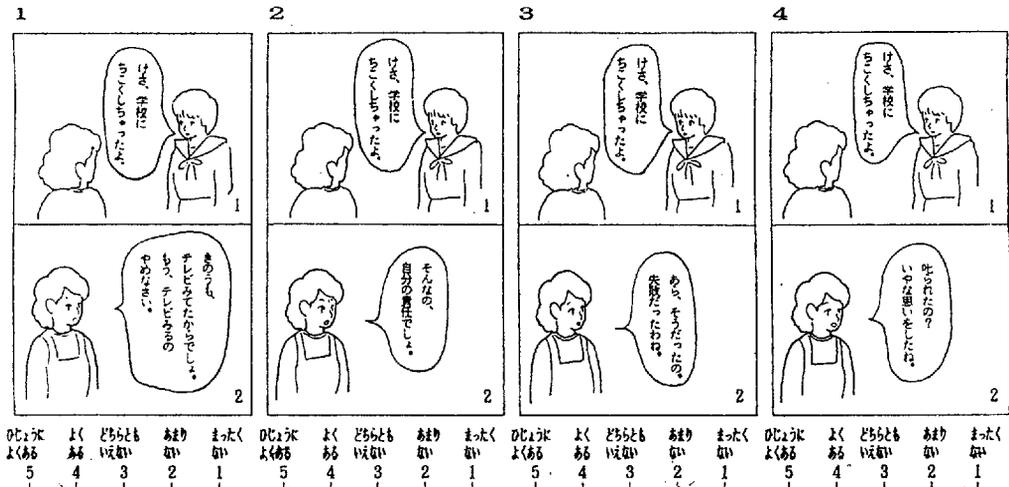
【研究方法】

この研究はコントロール群と精神科受診群において、母親とのコミュニケーションを通して、自己不全感、あるいは自己完結感の伝達に違いがあるか否かを知ることが最終目的の一つとしている。

しかし今年度は時間の関係で精神科受診群の十分な件数を得ることができず、コントロール群のみの検討に終わった。

前掲の調査用紙を山口市郊外の公立中学校2年性120名とその親に送付し、106名(組)からの回答を得た。回答の不備などから有効回答数は94(組)である。

図1



↓
 あなたのお母さんが、このような **言い方** をすることが
 「ひじょうによくある」ならば、5に○をつける。
 「まったくない」ならば、1に○をつける。
 よくわからない場合は、3の「どちらともいえない」に○をつける。

今回用いた調査用紙は、子どもが一定のメッセージ群(子が親に自分のもろさをみせるたぐいの=これをここでは”依存的”と呼んでおく)を示した場合に、親がそれを受け入れるような反応をする時(相互補完的パターン)と、それをはねつけるような反応をする場

合(対称的パターン)に、子の自己不全感がどうなるのかを調べたものである。

子からの依存的メッセージを受け入れる反応は相互補完的パターンに属し、このパターンに入る応答が多い場合は「親によって自分の気持ちは受け入れられた」と子が認知するとの想定から、「自己完結的応答」とされる。

一方子からの依存的メッセージをはねつける反応は対称的パターンに属し、このパターンに入る応答が多く選択される場合は自己不全感喚起的応答とされる。

具体例を図1に示した。

調査Iは図1のように子が特定のメッセージ(「けさ、学校にちこくしちゃったよ」)を示した時に、相互補完的関係に一致した親の回答は、

母「あれ、そだったの。失敗だったわね。」や母「叱られたの?いやな思いをしたわね。」であり、「自己完結的応答」とされる一方

母「きのうもテレビ見てたからでしょ。もうテレビ見るのやめなさい。」や

母「そんなの、自分の責任でしょ。」といった返答は対称的であり、「自己不全感喚起的」である。

自分の母親が横に並んだ4つの返答を選ぶことが、「ひじょうによくある」(5点)から「まったくない」(1点)までのどの程度あるのかを答えてもらう。

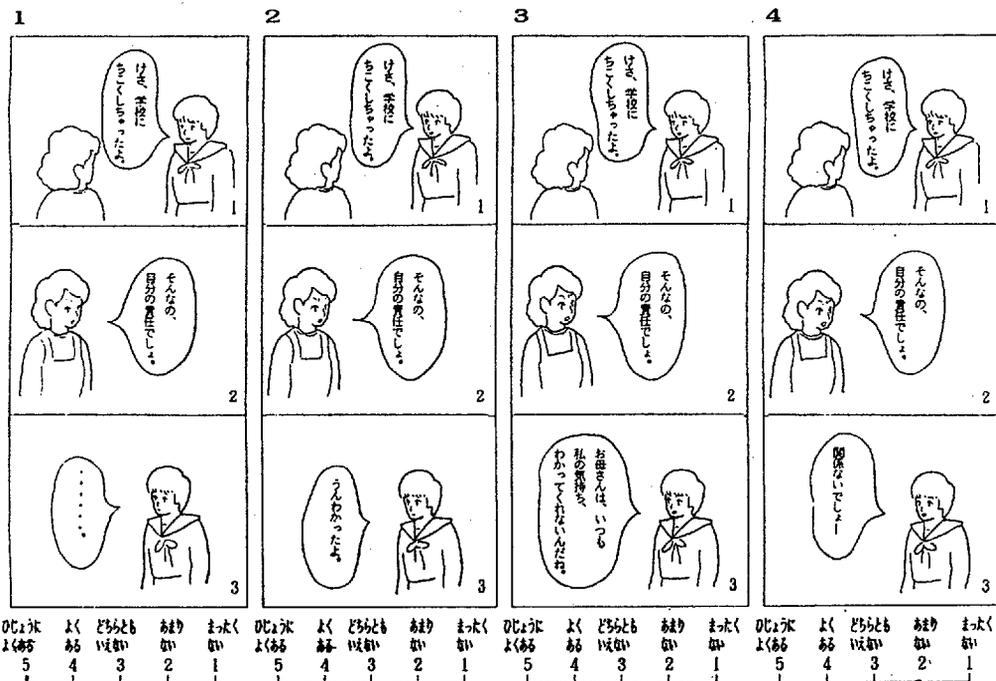
子側から出されるメッセージは6通りであり、「今度の成績おちっちゃうかもしれない。テストの点数悪かったんだ。」

「このままの成績だと、志望校にはいるのむずかしいって先生に言われたんだ。」

など、子どもが自分の状態を親に告げるものが主体である。

調査IIは、親が子からの「けさ学校にちこくしちゃったよ」という発言に対して、「そんなの自分の責任でしょ」とはねつける返答をされた場合に、どう応じるかを選択させるものである。

図2



あなたがこのように言うことが
 「ひじょうによくある」ならば、5に○をつける。
 「まったくない」ならば、1に○をつける。
 よくわからない場合は、3の「どちらともいえない」に○をつける。

図2にあるように、左二つは黙るか、または親の返答を受け入れるものとなっており、親からはねつける対応に相互補完的に応じるもの、右二つは、「お母さんはいつも私の気持ち、わかってくれないんだね」と親の応答にこちらも言い返すものとなっており、対称的パターンで応答するものである。

ここでは子が、例えば「けさ学校にちこくしちゃったよ」という、いわば「もろさ」を示すメッセージを提起した時に、親が（はねつけるような）対称的メッセージで対応するのは、子の自己不全感を喚起しやすい、という前提と、さらに、そのように親が対称的（はねつけるような）メッセージで対応した場合に、子は黙ってそれを受け入れるのか（相互補完的パターン）か、または子ははねつけるような返答をする（対称的パターン）のかが明らかにされる。

調査IIでは、親からはねつけるような対応に、子ども同様の、はねつけるような返答をできる方が、より自己不全感喚起的応答ではない、という考えが前提となっている。

調査IIIは「私は人とうまくつきあっていけるほうです。」「私は失敗すると、よく自分のせいだと思ってしまいます。」などの23項目の質問にはい、いいえ、で答えてもらい、反転項目などを処理した後の合計点数から自己評価の程度を知るものである³⁾。

[結果]

- まず以下の説明及び図に用いる記号の定義を述べる。
- P-1(L): 保護者（母親）の調査Iの左二つの点数の合計（自己不全感喚起的応答）
- P-1(R): 保護者（同）の調査Iの右二つの点数の合計（自己完結的応答）
- P-2(L): 保護者（同）の調査IIの左二つの点数の合計（自己不全感喚起的応答+親からの対称的応答を受け入れる）

P-2(R): 保護者(同)の調査IIの右二つの点数の合計
(自己不全感喚起的応答+子も対称的応答をする)

C-1(L): 子どもの調査Iの左二つの点数の合計
(自己不全感喚起的応答)

C-1(R): 子どもの調査Iの右二つの点数の合計
(自己完結的応答)

C-2(L): 子どもの調査IIの左二つの点数の合計
(自己不全感喚起的応答+親からの対称的応答を受け入れる)

C-2(R): 子どもの調査IIの右二つの点数の合計
(自己不全感喚起的応答+子も対称的応答をする)

All Data: 全部のデータ

BOYS: 男子のみのデータ

GIRLS: 女子のみのデータ

1. 調査Iと調査IIを合計してみた結果

最初に調査Iと調査IIの回答で左側の2列の設問の合計点数(自己不全感喚起的応答)と、右2列の合計点数(自己完結的応答)について以下を検討した。

仮説1: 母親における自己不全感喚起的応答

(P-1(L)+P-2(L))は、子の性別による差はない。言い換えれば、母親が自己不全感喚起的応答を自分の親との間にもったと感じていた場合、子どもの性別によって同じ応答をするのに違いがあるかということになる。

仮説2: 子どもの自己不全感喚起的応答(C-1(L)+C-2(L))では性別による差がある。

仮説3: 子どもの自己完結的応答(C-1(R)+C-2(R))では性別により差がある。

仮説4: 母親と子どもの自己評価の相関の程度は性別による差がある。言い換えれば、母親の自己評価の高低が子の自己評価に影響するかどうかである。

仮説5: 母親における自己不全感喚起的応答(P-1(L)+P-2(L))は子における同応答(C-1(L)+C-2(L))と相関がない。

仮説1については、母親におけ自己不全感喚起的応答と子の同応答が、子の性別によって違いがあるかどうかであるが、これは相関がなかった。

仮説2では、男女間で自己不全感喚起的応答に差が認められた。男子の方が点数が高い。

仮説3は、男女間で自己完結的応答に差はなかった。

仮説4では、自己評価点数(調査III)で母親と子の性別による相関を見たところ、男女で差が認められた。

女子の場合母親の点数と相関がある。男子はない。

仮説5であるが、母親の自己不全感喚起的応答と子の同応答の相関は、標本数94、相関係数 $r=0.5311725$ 、

寄与率 $r^2=0.2821442$ であった。F検定で相関係数の有意性が認められた。

2. 調査Iと調査IIをそれぞれ別に合計した結果の検討
保護者(母親)と子どもでの調査Iと調査IIでの点数を、各項目間の類似度を主成分分析で検討した。

図3: All Data

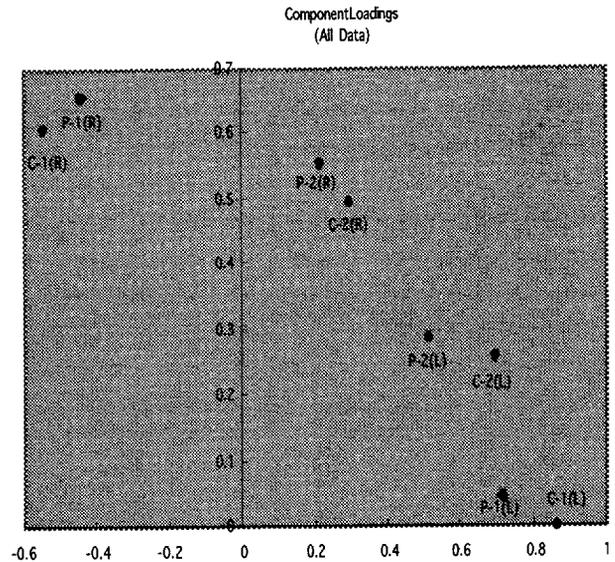


図3は全データでの、各項目の類似度を表わす。P-1(R)とC-1(R)、P-2(R)とC-2(R)、P-2(L)とC-2(L)、P-1(L)とC-1(L)のようにそれぞれの項目同士が似た傾向にあることが分かる。

また、P-1(R)とC-1(R)のペアは、他の3組とは横軸の符号が逆であり、異なる性格のものであることを表わしている。

P-1(R)とC-1(R)は、自己完結的応答であり、(親が自分の親とのあいだにまあまあ満足できる応答をしていたと思う場合、その子も親とのあいだに満足できる応答をしている) プラスのイメージであり、他の項目がマイナスのイメージであるのに対比しているものと解釈される。

またこのグラフの横軸は、負の方向が好ましい対応であり、正の方向が好ましくない対応であると言える。すると、P-2(R)およびC-2(R)は、絶対的な反応としては好ましくないが、P-2(L)およびC-2(L)よりはよいと言えるのだろう。

図4と図5は、同じ傾向を男女別に見たものである。男女別にするとばらつきが増えるが、図5のGIRLSにおいてP-1(R)とC-1(R)の近さが注目される。あえ

で解釈すれば、優しく育てられた母親は自分の娘に対しても優しく接することを表わしていると考えられる。

図4:BOYS

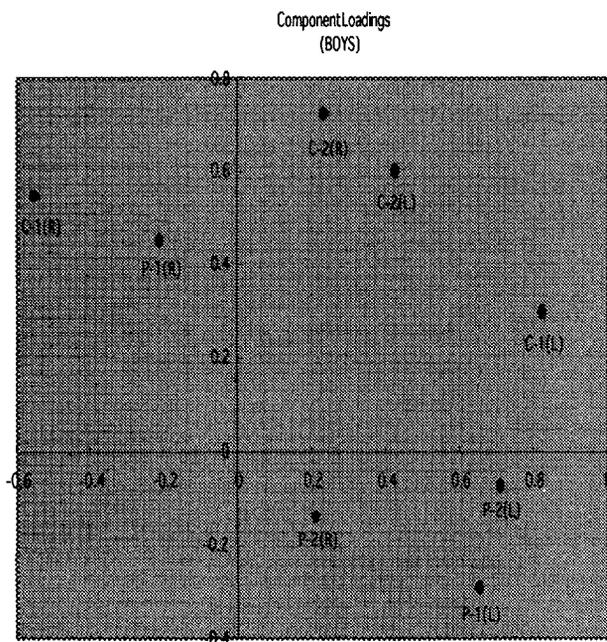
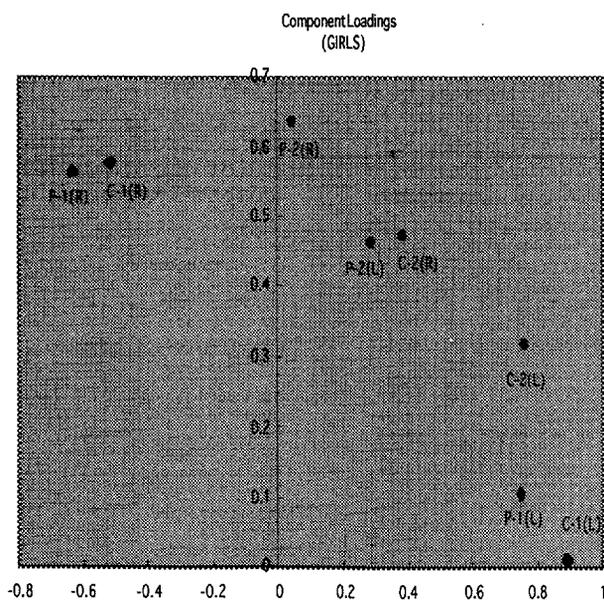


図5:GIRLS



3. 男女間での差異 (表1 参照)

各項目で男女間の点数に差があるかどうかを見ると、統計的に差が認められたのは、C-1(L)のみであった。これは母親は息子に対して娘に対するよりも厳しく(冷たく)接していることを示している。C-2(L)の値も男子の方がやや大きく、母親の接し方によって子どものストレスが増していく様子も伺える。

表1

男女間の平均値の差

	男	女	t-値	P-値
P-1(L)	27.98	25.77	1.087	0.2797
P-1(R)	37.32	36.85	0.267	0.7902
P-2(L)	<u>30.48</u>	<u>26.48</u>	<u>2.100</u>	<u>0.0383</u>
P-2(R)	33.04	31.58	0.829	0.4093
C-1(L)	<u>32.25</u>	<u>26.78</u>	<u>2.423</u>	<u>0.0172</u>
C-1(R)	31.19	33.96	-1.523	0.1307
C-2(L)	31.52	27.56	1.893	0.0613
C-2(R)	30.57	32.11	-0.835	0.4054
P-1(L-R)	-9.61	-10.85	0.413	0.6803
P-2(L-R)	-2.56	-5.06	1.008	0.3160
C-1(L-R)	<u>1.06</u>	<u>-7.18</u>	<u>2.395</u>	<u>0.0184</u>
C-2(L-R)	<u>1.30</u>	<u>-4.54</u>	<u>2.527</u>	<u>0.0131</u>

[考察]

研究協力者が通常行なっている業務が、3歳から思春期後半にかけての、広義の「子ども」の精神保健援助であることから、今回「妊産褥婦へのエモーショナル・サポート」研究班の一端に加えていただいたことは、何よりの光栄であるとともに、一体何ができるのかについての困惑があった。

しかし、人が生まれ、成長し、やがて大人になって、次の世代を再生産していくライフサイクルのプロセスで、親世代と子世代とを、そこで展開されるコミュニケーションを通して同時に観察する機会に多く恵まれる立場から、何が言えるのかを考えてみた。

そこでのやりとり(コミュニケーション)が、親世代と子世代にとってストレスとなったり、子どもが学校を起点とする社会生活に自らを適応させていく経過の中で、あるやりとりの特性は、子の精神保健を悪化させ、その変更は子の精神保健ばかりでなく親の精神保健をも改善する、という日々の経験から言えることを提示するのも意味があるかもしれない、と思い、研究班の一部に加えていただくことにした。

今回私が提起したい視点は、まとめれば次の6点になると思う。

6-1) 親の精神保健と子の精神保健はおそらく連動するものである。

コミュニケーションという関わりあう二者のあいだに

交されるメッセージ群の構成のされかたは、子が成長するに従い、その構成パターンが変化することは知られている。

しかし、被虐待児童症候群での報告から分かるように、自らが虐待されて育った経験のある人間が親になった場合に、今度は自らが虐待を加える側に廻ることがあるように、我々が親とのあいだに展開する関係の在り方は世代を超えて受け継がれる性格も有しているようである。

そこで、すでに自己不全感喚起的応答が高い子どもでは、「不登校感情（学校に行きたくない気持）」が高く、また「自己評価」が低い、という結果が報告されている調査用紙を用いて、親世代と子世代とでどの程度コミュニケーションの在り方に共通のものがあるのかをしてみることにしたのがこの報告の基盤である。

6-2) 親と子どもの間で、今回の調査で調べた項目について、どれほどの類似性があるかに関しては以下のことがわかった。

a) 調査Iは、子が自分のもろさを示すメッセージを出して、親の対応を求めた場合に、親が子のもろさを受容する応答をするもの（自己完結的応答）と、はねつける応答をするもの（自己不全感喚起的応答）のいずれが多いかを調べるものである。

また調査IIは、子がもろさを示すメッセージを親に提示した時に、親がそれをはねつける応答で戻した時に、子がそれをどう受けるかを見るものである。

親からはねつける応答を、相互補完的に受け入れるものは、親と同じく対称的メッセージ（「お母さんはいつも私の気持ちをわかってくれないんだね。」や「関係ないでしょ。」）で戻すよりも自己不全感喚起的である、という前提があった。

調査Iでの親と子どもの自己不全感喚起的応答（P-1(L)とC-1(L)）、調査Iでの親と子どもの自己完結的応答（P-1(R)とC-1(R)）、調査IIでの親と子どもの自己不全感喚起的応答（P-2(L)とC-2(L)）、調査IIでの親と子どもの自己完結的応答（P-2(R)とC-2(R)）のそれぞれの類似性を主成分分析したところ、図3（全データ）と図5（女子）においては、それぞれ親と子とで、対応する項目群に類似性のあることが判明した。

母親と娘の間では、調査Iの自己完結的応答と、自己不全感喚起的応答のいずれも、かなり近い距離にあることから、これら二つのコミュニケーションパターンとそれにもとづく自己不全感、または自己完結感覚が世代間で伝達されることはかなりありそうである、と言える。

ひらたく言えばやさしい母親に育てられた経験は、自分の娘にやさしくなれるように作用し、はねつけられる経験は、自分の娘にもはねつけるような対応をとりやすいように作用するということであろう。

b) 調査全体を通しては、親と子との間で自己不全感

について28%の寄与率があることが分かった。子どもの反応のうち、28%は母親の反応に依存している（影響される）のである。

6-3) 子が親に対して、「もろさ」を提示するメッセージを出し、それに対して親がはねつけるような返答をした場合、親からの「はねつけ」を子がじっと受け入れる場合の方が、子も同じく「はねつけ」する場合よりも、子の精神保健は好ましくないであろうという仮説にたって検討した結果、実際そうであるらしいことが分かった。（図3で、P-2(L)、C-2(L)がP-2(R)、C-2(R)よりも負の方向に位置する）

今回調査対象とした中学2年生は、いわゆる“反抗期”に入っているのが普通であろうし、“反抗期”は親からのメッセージをはねつけるメッセージで戻すはずの時期であることから、“反抗期”に入っていない中学生は、すでに“反抗期”に入っている群よりも好ましくない精神保健状態にあるということを示唆するのである。

6-4) 中学生年齢においては母親は息子に対しては娘に対してよりも厳しく接することが示唆された。息子が男性としてのアイデンティティーを獲得するのに思春期が重要な時期であることから、この時期大きく娘での女性性、男性での男性性が飛躍することも、このような結果と関連しているのかもしれない。

6-5) 今回は精神科を受診している同年齢集団とその親については件数の不足のため、比較検討することができなかった。

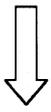
精神科受診は、なんらかの精神保健の不全状態を意味するものと考えれば、疾患群との比較は、親から子への自己不全感がどのように伝わっていくかを解明する上で、さらに豊かな結果をもたらすことが期待される。また、自己不全感喚起的応答群が疾患群においてコントロール群よりも高いことが判明すれば、自己不全感喚起的応答を持続して経験する子どもは、そうでない子どもよりも精神的疾患にかかるもろさがさらに大きいことが証明されたことになる。

もしも親と子との間で自己不全感喚起的応答を減少させ、自己完結的応答を増加させる方法が開発されれば子の精神保健の改善を予防する上で有用なノウハウが得られると期待できる。

6-6) 今回は妊娠産褥期にある女性を直接の対象とせず、子世代とその親世代とで、自己不全感の生じるコミュニケーションがどのように伝達されるかを調べてみた。今回の結果を踏まえて、妊娠産褥期にある女性のコミュニケーションパターンを解明し、女兒が成人し、妊娠出産し、子を育てていく中で、どの時期においてどのような治療的介入を行なうことで、将来の子のよりよい精神保健を保証できるのかをさらに調べていきたいと思っている。

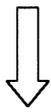
[参考文献]

- 1) 大河原美以：「中学生の母子間の『コミュニケーションの不全感』とSelf-Esteemとの関係」；Batesonの理論にもとづいて 家族療法研究 Vol.10 No.2, 109-119,1993
- 2) 大河原美以：「登校意欲にかかわる母子間の『コミュニケーションの不全感』」家族心理学研究 Vol. 8 No.1,1-12,1994
- 3) 梶田叡一：自己意識の心理学 第二版 東京大学出版会, 1988



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



[要約] :母子間で展開されるコミュニケーションにおいて、自己不全感がどのようにして母親から子どもへと伝達されるかを知る目的で調査を行なった。今回の調査の対象は某公立中学校の2年生106名とその母親である。用いた調査用紙は、自分が母親にある発言をした時に母親が返すであろう返答を二つの群に分け、どちらの群の返答をされることが多いと子が感じているかを知るためのものである。この場合、ある「発言」は、例えばテストの点数が悪かったことを報告するといった、子どもが自分の「もろさ」を親に明かすものが主として選択提示してある。母親に記入させる場合は、母親が中学生時代に、自分の母親がどのように返答したかを想起して選ぶように指示してある。子があるメッセージを出した場合に母親が示すであろうと子が考える二つの応答群は、

(i)自己不全感喚起的応答群、

(ii)自己完結的応答群

とされ、自己不全感喚起的応答群での合計点数が高い場合には、「自己評価が低い」、「学校に行きたくない気持ちか強い」ことと相関することかすでに示されている。

また、親の反応及び子どもの反応8項目から、どの程度母親との間に交されるコミュニケーションの在り方が、子どもの自己不全感あるいは自己完結感を説明し、またどの程度母親のコミュニケーション反応特性が子に伝えられるかを検討した。